

書評・山本義隆著『私の1960年代』（金曜日、二〇一五年一〇月八日）

猪野修治（湘南科学史懇話会・代表 科学史）

はじめに

著者は、一九六〇年に東京大学に入学し、六二年の大学管理法闘争をかわきりに、ベトナム反戦運動、東大医学部に端を発した東大闘争を主体的に闘った。本書は、その著者が遭遇した多様な事態を、半世紀を経て回顧した壮大で貴重な記録である。私はあわせて四六年前の著書『知性の叛乱』（一九六九）も読み返した。そこから浮かび上がるのは、半世紀の歳月を経てもなお、著者の思考スタンスは一貫して持続され、著者が関わり実体験した諸事実を、歴史的・重層的な視点から虚心坦懐に論述していることである。本書の全貌を述べるのはとうてい不可能なので、いくつかの項目に絞って、なにがしかの所感を述べたい。

一、『東大闘争資料集』

現在、科学史家のはしくれにいる私は、まずもって著者がほぼ六年もの歳月をかけ、幾人かの支援を得るものの、ほぼ独自に編集し作成した『東大闘争資料集』全二八巻（一九九二年完成）を紹介しておきたい。『同資料集』にかんしては、著者によると次のようである。

「一九六七年度の医学部闘争から一九六九年二月までの、闘争の過程で作られたビラ、パンフレット、討論資料、大会議案、そして当局文書約五〇〇〇点を收拾し、データベースに収録し、『東大闘争資料集』としてゼロックス・コピーのハードカバー製本二八巻と、マイクロフィルム三本を作成し、一九九四年に国会図書館と大原社会問題研究所に収めました。データベースへの打ち込みは私一人でやり、八七年以来数年間は、ほとんどこの仕事にかかりきりでした」（pp.101-110）。

この貴重な資料集は著者が自腹で作成したものである。最近ではこの資料集の存在が徐々に知られ、海外の研究者からも問い合わせがあるとも聞いている。その切れば血のような重要な重要で膨大な一次資料の一端は、本書の随所に利用されている。私もこの資料集を国会図書館で何回か見ている。日本の歴史上に永遠に元東大共闘会議（全共闘）代表と刻み込まれ続けざるを得ない著者が、全身全霊で、自らが関わった大学闘争の現実的実態を、世界で唯一の歴史的資料として、後世に伝えられ読まれることを希求して残したのである。したがって、『同資料集』は永遠不滅であり、それを作成し刊行した著者の誠実で真摯な使命感は、かつての同志への連帯でもあり、科学思想史家としての限りない学問的良心の現れでもある。

それに、もうひとつ重要なことを指摘しておきたい。著者はことあるごとに日大共闘会議（日大共闘）に限りない賛辞と感謝の念を表明していることである。国会図書館に

は日大全共闘情報局の記録『日大全共闘資料集 情報局情報ノート 上巻 1968』同 下巻 1969』の二巻が収められているが、この資料集は、六八年七月から六九年九月まで一年以上も一日も欠かさず、警察と右翼の動向を克明に記録したもので、その司令塔としての情報局を形成した日大全共闘の力量は瞠目すべきだ、としたうえで、本当の意味での全共闘は日大全共闘によって作り上げられ、掛け値なしに戦後最大の学生運動で最後の学園闘争であった、と指摘し、さらに、東大全共闘は日大全共闘に恩義があり借りまで作っている、とまで述べ、「いまでも涙が出てくる」と回顧している。その涙は闘争の前線にいたものにしかり理解できない。

二・物理学徒から科学史家・物理教育者へ

著者は心底、物理学と数学が好きな方である。物理学と数学をやるために生まれてきたと言ってもよい。とくに関心を向ける学問領域は、物理と数学が交錯する素粒子論（場の量子論とファイマン・ダイアグラムの計算、等々）であった。一九六九年一月十八・十九日直後、著者に思わぬ逮捕状が出て、同年九月五日早朝、日比谷公園前で逮捕されることになった。一九七〇年十月末に保釈されるものの、翌一九七一年三月、再び逮捕され六月末まで勾留された。

この間、警視庁の留置場、巣鴨、小菅に勾留されるが、この勾留中当初、接見や面会や読書が禁止される著者が、いかに活字に渴く飢えを感じ、生の根源とも言える物理学の書物を求めていたかを読むと、読者の私まで辛くなってくる。やがて物理学に飢えていた著者はやがて、差し入れが可能となった独房で、朝から晩まで物理学の書物（ランダウーリフシッツの『場の古典論』『量子力学』など）を貪るように読み続けることになるが、その心はいかばかりか、想像に難くない。

ある程度の物理学の書物を読み終え、ほんのすこしばかり身心の安定を得た著者は、次に、ボルケナウの『封建的世界像から市民的世界像へ』（場所：巣鴨）やルカーチの『歴史と階級意識』（同：小菅）を読み始める。そのときにこれらの書物が差し入れられる際、拘置所側が出した三枚ほどの「私本閲覧許可証」の写しを本書で見ることができ（P.二九八）。何ともリアルで生々しい。これだけが保存されていることは、これらの書物がいかに大きな影響を与えたかを物語っている。

というのも、二つの書物、特に前者のボルケナウの書物は一九六五年頃、すでに読んでいたものだが、この書物の再読と、後者のルカーチの書物を読み、そこに言及されているドイツの哲学者エルンスト・カッシーラーの『認識問題』に刺激を受け強く惹かれて行くようになるからである。私の見るところ、このカッシーラーの著作に関心を持つことになったことが、著者が物理学徒から科学史家へ転じる大きな要因となったと思われる。

こうして著者は、本格的に方針を転換し、独学で科学史を志すことになり、学問としての科学史学の構築に専念した廣重徹の著作や論文をあらためて再読することになる。その

後の著者が、カッシーラーの多数の翻訳書を刊行していることは周知の事実である。

さてカッシーラーの翻訳の仕事と同時に著者は、物理学会の米軍資金問題、東大闘争、ベトナム反戦闘争等々の渦中で具体的・実践的に展開した近代科学批判の思想的礎を探るべく科学思想史の研究に没頭して行くが、アカデミズム・学会、学者集団の学術研究システムから意識的に離脱し関係を絶ち、独力で科学思想史の研究に専念し、大作を続々と刊行することになる。

具体的には後年に刊行する『重力と力学的世界』（一九八一）、『古典力学の形成』（一九九七）、『熱学思想の史的展開』（一九八七）、『磁力と重力の発見』全三巻（二〇〇三）、『十六世紀文化革命』全二巻（二〇〇七）、『世界の見方の転換』全三巻（二〇一四）などである。いずれも重厚な書物ばかりで、その仕事ぶりはすさまじく、その著作はいずれも圧巻である。

著者の著書の論述スタイルは独特である。その独特の論述スタイルは、著者によるとつぎのようである。「それは学術書と啓蒙書、専門書と一般書のどちらとも言えない、あえて言えばどちらにも通用する、そのようなスタイルを意識的にとってきました。ひらたく言えば、専門家にも読むに堪え、かつ一般の読者にも面白いものを心がけてきました。その試みに成功したかどうかは、自分ではわかりませんが、いずれにせよ、直接一般の批判に曝される形での学習と思索の公表は、学問を市民の手に取り戻す第一歩ではないでしょうか」（同P.1100）

このきわめて重要な心構えから執筆された論述スタイルは、大佛次郎の名著『パリ燃ゆ』全四巻（一九七五）からヒントを得ている、と推察しているが、かつて私はその論述スタイルを「物語としての物理学」と評したことがある。

最後に物理教育者の側面を考えると、著者が勤務する予備校の講義と多数の受験参考書は、多くの受験生を魅了している。受験参考書とは言え、その年齢に即し読まれる本格的な物理学書であることには変わらない。若い時代に物理学徒から科学史家・物理教育者へ転じて行く様子を、いささか本論から離れ立ち入って述べたのは、その道中の数々の書物は、本質的に一九六〇年の後半における著者が遭遇し、主体的に担った東大闘争が決定的な動因となり、上記の書物の内容と論述スタイルもまた、東大闘争と不可分の関係にある、と私は思うからである。

三．物理学会の米軍資金拒否闘争と現代の動向

一九六七年五月五日（金）の「朝日新聞」は第一面で、前年一九六六年九月の半導体物理国際会議（日本物理学会主催）の一部に米軍資金（アメリカ合衆国陸軍極東研究開発局）が出ていることを、大きく報じた（P.六三）。ちなみに、この米軍資金の導入をはかったのは、鳩山道夫（ソニー研究所長）と上村泰忠（東大物理学教授）で、米軍との仲介をはかったのは茅誠司（元東大総長）であった。

当時は米軍のベトナム軍事行動が拡大の一途をたどっていた時期で、物理学者が人殺しの米軍の資金で研究するとは何事かと思つた著者は、「軍関係資金問題に関する物理学有志の会」を立ち上げ、四項目の要求を掲げ、一九六七年九月の日本物理学会の総会で議決させた。このことは物理学の世界では有名な話で、その立役者が本書の著者だつた。

その四項目のうちもつと重要なのは第三番目で、「日本物理学会は今後内外を問わず、一切の軍隊からの援助、その他一切の協力関係を持たない」という画期的なものだつた。その議決は今日でも生き続けている。単純に言えば、人殺しのための学問研究はやってはいけない、という当たり前の議決だが、物理学者のあくなき好奇心には、人殺しの科学研究でさえ学問だとする魔性を帯びていることも事実である。

さて現代に目を転じて見ると、最近の欺瞞的・詐欺的・反知性的・刹那的で墮落した現政権の安保法制によって、現政権は上記の物理学会の決議に示された理念を踏みにじり、自衛隊活動と連動する防衛装備庁を発足させ、武器輸出を積極的に進め、米軍との軍事協力の研究まで具体的に進めようとしている。物理学研究の初心者が、日本物理学会の重い意味をもつ決議の拘束を忘れ、大きな軍事研究に雪崩を打って巻き込まれていく可能性は十分にある。現在は、そのような重大な局面にある。

米国における原爆製造計画「マンハッタン計画」のような科学技術の再現が、時代錯誤も甚だしく、日本の科学技術の世界にも到来しようとしている。科学技術の根幹をなす学問を担う物理学者と物理学会は、どのように反撃し対処するのであるか。いまの事態を認識するには、著者たちが上記で提唱し、物理学会が決議した内容でなければならないのは論を待たないが、この決議は、ますます重要な光彩を放つだろう。反撃と対処ができれば、物理学研究自体を辞めることを覚悟すべき事態なのである。

四・科学至上主義と科学研究停止（モラトリウム）

戦前から敗戦後にかけて、科学技術の価値観の大転換を余儀なくさせられた。その際、まず日本がアジア諸国に侵略行為を働いたこと、そして米国との戦争に負けたことを率直に認め、深い反省の態度を表明すべきだった。しかし現実には、日本が戦争に負けたのは科学主義の脆弱さにあつたのであり、どのような時代にあつても、科学主義は真理探究の絶対条件である、とする精神は変わらなかつた。ただ科学的精神を鼓舞して科学至上主義を基調とする国家建設がはかられたのだ。著者は、戦後の科学技術者はこのようにして、心底それまでの科学的価値を反省し、その反省の認識に基づいて新たな科学技術を模索することを怠つた、と厳しい批判を加えている。

例えば、原爆投下直後の地獄絵の広島を調査した物理学者の仁科芳雄や、被爆し「浦上の聖者」と呼ばれる永井隆（長崎医大助教授）ですら、広島の惨劇を目の当たりにてもなお原子力の将来に信頼を寄せていることを指摘して、「科学者が未曾有の殺傷力と破壊力を持つ兵器を生みだしたことにたいする悔恨や罪悪感、あるいは畏怖の感情等は、片鱗も見

あたりません」(同P.七四)と強い調子で論述している。

平たく言えば、著者が強い調子で批判するのは、このような惨劇を受けてもなお、原子力研究の停止(モラトリウム)の思考ができないほど、科学至上主義に呪縛されていた、ということである。幕末・明治から科学至上主義は一貫して理想化され続け、どのような惨劇下でもその科学神話が崩壊することはなかったし、科学者が己の研究に人間としての罪の意識を感じることはなかった、というのである。

この点で著者は、科学者の罪の意識の観点から、だいぶ以前に科学者の世界で物議をかもした文芸評論家・唐木順三の著書『科学者の社会的責任』についての覚え書の中に、共感を表明している。唐木の主張は端的に言えば、核兵器を作り出しておきながら、その研究を担った科学者たちは科学研究の犯罪性や罪の意識は希薄だ、というのである。このような唐木の主張に共感を寄せる著者の認識に、私は目を見張り、またふかく共感する。

というのも、これまで科学者や科学論者が、唐木の主張に共感した例をほとんど知らないからである。それどころか、戦後の科学界の代表的論客である物理学者の武谷三男は、唐木の主張を全面的に批判する『科学者の社会的責任―核兵器に関して』(一九八二)まで刊行した。武谷は、唐木の主張は科学者の発言の全体構造をみない素人の議論的的外れだと批判する。その武谷には、幕末・明治以来、連綿と引き継がれてきた科学至上主義が内在し、あくまでも科学者と科学至上主義の存在を、不動のものとして自己肯定している。その立場からは、科学研究を停止(モラトリウム)するなどという精神は出て来えないのだ。

私が著者の見識に目を見張ったのは、ご本人は否定するだろうが、同じ物理学者の範疇に入る、と私には思える著者が、現実に米軍資金導入問題に具体的に関わり、厳しい東大闘争を実践的に闘った体験から、物理学者の存在を自己肯定し、科学技術の進歩を絶対化する立場からの核問題の批判は不十分だとする唐木の主張に、共感していることである。

これはいわば科学者の自己否定にも通じる議論であるが、かつて一九七〇年代に原子力資料情報室を立ち上げた際の、武谷三男と高木仁三郎の微妙な認識の違いにも通じている。つまり武谷はあくまでの科学技術の諸問題の専門家の立場を保持し、その保持された立場から、全国の原子力の問題に苦悩する人々に助言やら支援をやるべきだ、と主張した。

これに対して高木は、身分が保障された科学者の立場をいったん否定し、苦悩する人のなかで彼らとともに闘い、科学の諸問題を思考する立場を主張し、現実はその道を選択した。科学者と核の問題にかんする著者の見識には、近代科学技術批判に関わる立ち位置の深い洞察が内包されていると思える。

五・産学官癒着の構造とその歴史的源流

三・一一以後、原発の安全性や建設許可等を審査する大学教授が、電力会社や原子炉製造会社から多額の金銭を受領している事実が明らかになった。著者は新聞各紙の記事をも

とに具体的に人名をあげている。班目春樹（東大教授）、岡本孝司（同）、関村直人（同）、山口彰（阪大教授）、山本章夫（名大教授）をはじめ、多数の国立大学の教授たちである。その中の班目東大教授が「特段の問題はない」と居直っていることにたいして、著者は、「冗談ではない」「この行為は常軌を逸している」、と厳しく批判している。

さらに三菱グループから東京大学（五神 真総長）に対して、約三億六七〇〇万円もの寄付がなされ、三菱が東京大学の運営に深く関わっている事態を踏まえ、「とうとうここまで来てしまったのか、というのが正直な感想です」（同P.二七〇）と呆れかえっている。

この常軌を逸した事態が、何故にかくも平然と起こるのか、との源流を探る視点から見ると、本書の以下の章「日本の科学技術のはじまり」（14章）「軍学協同のはじまりについて」（15章）「戦時下の科学技術について」（16章）「とくに東大工学部のケース」（17章）「高度成長の影と戦後民主主義」（18章）を読むと、沢山のことが語られ、とても勉強になる。それらの考察を踏まえ、東京大学工学部が成立するまでの詳細な歴史的源流を論述しながら、著者は「原子力村を作りだした東京大学工学部原子力工学科のルーツを見る思いがします」（同P.一八二）と述べている。

幕末・明治以来の日本の科学技術は、率直に言えば、軍部主導の戦争のための研究であって、敗戦後は、アジア諸国にたいする侵略行為を何ら反省することもなく、戦争に負けたのは科学技術力が脆弱だった、との短絡的思考から、戦前の科学技術の思想をそのまま戦後まで引き継いだことに大きな要因がある、と著者はみている、と私には思える。

その典型例が東京大学工学部で、戦時下の軍事科学研究と密接に関係し、戦後もその思想が変わることがなかった。だから先に見たように、原子力村を形成する御用学者たる東大教授たちが、ハイエナのごとく研究費に群がり取りつき、結果的に、今日の原因被害者を出し続けるという構造を呈している、とも考えられる。ことは重大である。

六・私の一九六〇代後半からのこと

一九六九年二月二一日（金）のことである。日比谷公会堂で開催された「東大闘争報告―労学市民連帯集会」において、東京大学理学部大学院生（素粒子論専攻）で東大全共闘代表の著者は、のちに語り継がれる演説を行った。この演説で著者は、東大闘争の出発点となった東大医学部の登録医制度や医療の帝国主義的再編などに鋭い分析を加え、東京大学の存在と現状を徹底的に批判し、安保・沖繩闘争に連帯することを表明した。

私はこの歴史に残る演説を、数千人の群衆で埋め尽くされた日比谷公会堂二階の中央最前列で聞いた。この演説は著者の『知性の叛乱』（一九六九）に収録されている。当時の私は、東京大学宇宙航空研究所の材料科学研究室で研究助手のようなことをやっていた。同研究所の少なくとも私が所属していた研究室では、政治的には全く無風の状態で東大闘争など話題にすらならなかった。しかし、すぐ近くにある駒場や街頭で連日繰り広げられている同世代の運動に、私が揺さぶられるのは当然のことだった。

将来は何らかの形で身分が保証される同研究所で仕事をするつもりでいたので、いろいろと悩んだが、結局、上記の演説の影響や諸般の種々の事情から、同年六月二六日に同研究所を自主退職し、完全に無職となった。さまざまな日雇の仕事をやりに食いつないでできた。いま振り返ると人生の大きな転換点だった。

一九七二年八月、町田市に住んでいた私は、隣接する相模原市の米軍基地相模補給廠から南ベトナムへの戦車搬出阻止闘争に加わるようになり、毎日曜日は相模補給廠前の集会やデモに参加していた。自治体を巻き込んだ激しい闘争だった。この反米軍基地闘争は科学技術者の社会的責任の問題とも密接に関係していた。一九七三年七月から一ヶ月ほど、南ベトナムを含む東南アジア諸国を取材し、東京の反戦集会で「ベトナム現地報告」を行っている。一九七五年四月、ベトナム戦争は終結した。

その一方で、若い時に、諸般の事情から、十分に勉強する機会に恵まれなかったこともあり、もろもろの学問にたいする飢えにも似た衝動的な欲求が湧き起こっていた。数年後の一九八〇年九月、高田馬場にあった「寺子屋教室」で、著者が講師を務める勉強会（力学的世界の系譜）に参加することになった。これも大きな転換点となった。それ以来、自分で言うのも気が引けるが、水を得た魚のように、読書と思索の日々を送ることになった。とりわけ著者の膨大な書物の読み込みを通じた思索は、三五年以上にも及んでいる。その読書と思索は今日まで続き、私の精神生活を支える大きな指針となっている。

おわりに

以上で『私の1960年代』に記されている膨大な内容のほんの一部について、僭越ながら私の個人史を含め、ささやかな所感を述べた。振りかえれば、著者の『知性の叛乱』から本書までの半世紀にも近い時空を生きてきた著者は、一貫した思考スタンスで社会的諸事態と対峙し格闘してきたのである。

書評：山本義隆著『私の1960年代』（金曜日、二〇一五年一〇月八日）

猪野修治（湘南科学史懇話会代表）

はじめに

著者は、一九六〇年に東京大学に入学し、六二年の大学管理法闘争をかわきりに、ベトナム反戦運動、東大医学部に端を発した東大闘争を主体的に闘った。本書は、その著者が遭遇した多様な事態を五〇年ぶりに回顧した壮大で貴重な記録である。私はあわせて四六年前の著書『知性の叛乱』（一九六九）も読み返した。

そこから浮かび上がるのは、五〇年歳月を経てもなお、著者の思考スタンスは一貫して持続され、著者が関わり実体験した諸事実を、歴史的・重層的な視点から虚心坦懐に論述していることである。本書の全貌を述べるのはどうてい不可能なので、いくつかの項目に絞って、なにがしかの所感を述べたい。

一. 『東大闘争資料集』

現在、科学史家のはしぐれにいる私は、何と言っても、まずもって著者がほぼ六年もの歳月をかけ、幾人かの支援を得るものの、ほぼ独自に編集し作成した『東大闘争資料集』全二八巻（一九九二年完成）を紹介しておきたい。『同資料集』にかんしては、著者によると次のようである。

「一九六七年の医学部闘争から一九六九年二月までの、闘争の過程で作られたビラ、パンフレット、討論資料、大会議案、そして当局文書約五〇〇〇点を収拾し、データベースに収録し、『東大闘争資料集』としてゼロックス・コピーのハードカバー製本二八巻と、マイクロフィルム三本を作成し、一九九四年に国会図書館と大原社会問題研究所に収めました。データベースへの打ち込みは私一人でやり、八七年以来数年間は、ほとんどこの仕事にかかりきりでした」（本書 PP.三〇一—三〇二）。

この貴重な資料集は著者が自腹で作成したものである。最近ではこの資料集の存在が徐々に知られ、海外の研究者からも問い合わせがあるとも聞いている。その切れれば血のするような重要で歴大な一次資料の一端は、本書の随所に利用されている。私もこの資料集を国会図書館で何回か見ている。日本の歴史上に永遠に元東大全共闘会議（全共闘）代表と刻み込まれ続けざるを得ない著者が、全身全霊で、自らが関わった大学闘争の現実的実態を、世界で唯一の歴史的資料として、後世に伝えられ読まれることを希求して残したの

である。したがって、『同資料集』は永遠不滅であり、それを作成し刊行した著者の誠実で真摯な使命感は、かつての同志への連帯でもあり、科学思想史家としての限りない学問的良心の現れでもある。

それに、もうひとつ重要なことを指摘しておきたい。著者はことあるごとに日大全共闘会議（日大全共闘）に限りない賛辞と感謝の念を表明していることである。国会図書館には日大全共闘情報局の記録『日大全共闘資料集 情報局情報ノート 上巻1968』『同 下巻1969』の二巻が収められているが、この資料集は、六八年七月から六九年九月まで一年以上も一日も欠かさず、警察と右翼の動向を克明に記録したもので、その指令塔としての情報局を形成した日大全共闘の力量は瞠目すべきだ、としたうえで、本当の意味での全共闘は日大全共闘によって作り上げられ、掛け値なしに戦後最大の学生運動で最後の学園闘争であった、と指摘し、さらに、東大全共闘は日大全共闘に恩義があり借りまで作っている、とまで述べ、「いまでも涙が出てくる」と回顧している。その涙は闘争の前線にいたものには理解できない。

二. 物理学徒から科学史家・物理教育者へ

著者は心底、物理学と数学が好きな方である。物理学と数学をやるために生まれてきたと言ってもよい。とくに関心を向ける学問領域は、物理と数学が交錯する素粒子論（場の量子論とファイマン・ダイアグラムの計算、等々）に没頭する大学院生であった。一九六九年一月十八・十九日直後、著者には予想外に思わぬ逮捕状が出て、同年九月五日早朝、日比谷公園前で逮捕されることになった。一九七〇年十月末に保釈されるものの、翌一九七一年三月、再び逮捕され六月末まで勾留された。

この間、警視庁の留置場、巣鴨、小菅に勾留されるが、この勾留中当初、接見や面会や読書が禁止される著者が、いかに活字に渴く飢えを感じ、生の根源とも言える物理学の書物を求めていたかを読むと、読者の私まで辛くなってくる。物理学に飢えていた著者はやがて、差し入れが可能となった独房で、朝から晩まで物理学の書物（ランダウリーフシツの『場の古典論』『量子力学』など）を貪るように読み続けることになるが、その心中はいかばかりか、想像に難くない。

ある程度の物理学の書物を読み終え、ほんのすこしばかり身心の安定を得た著者は、次に、ボルケナウの『封建的世界像から市民的世界像へ』（場所：巣鴨）やルカーチの『歴史と階級意識』（同：小菅）を読み始める。そのときにこれらの書物が差し入れられる際、拘留所側が出した三枚ほどの「私本閲覧許可証」の写しを見ることができる（P.二九八）。何ともリアルで生々しい。これだけが保存されていることは、これらの書物がいかに大きな

影響を与えたかを物語っている。

というのも、二つの書物、特に前者のボルケナウの書物は一九六五年頃、すでに読んでいたものだが、この書物の再読と、後者のルカーチの書物を読み、そこに言及されているドイツの哲学者エルンスト・カッシーラーの『認識問題』に刺激を受け強く惹かれて行くようになるからである。私が見るところ、このカッシーラーの著作に関心を向けることになったことが、著者が物理学徒から科学史家へ転じる大きな要因となったと思われる。

こうして著者は、本格的に方針を転換し、独学で科学史を志すことになり、学問としての科学史学の構築に専念した廣重徹の著作や論文をあらためて再読することになる。その後の著者はカッシーラーの多数の翻訳書を刊行していることは周知の事実である。

さてカッシーラーの翻訳の仕事と同時に著者は、物理学会の米軍資金問題、東大闘争、ベトナム反戦闘争等々の渦中で具体的・実践的に展開した近代科学批判の思想的礎を探るべく科学思想史の研究に没頭して行くが、アカデミズム・学会、学者集団の学術研究システムから意識的に離脱し関係を絶ち、独力で科学思想史の研究に専念し、大作を続々と刊行することになる。

具体的には後年に刊行する『重力と力学的世界』（一九八一）、『古典力学の形成』（一九九七）、『熱学思想の史的展開』（一九八七）、『磁力と重力の発見』全三巻（二〇〇三）、『十六世紀文化革命』全二巻（二〇〇七）、『世界の見方の転換』全三巻（二〇一四）などである。いずれも重厚な書物ばかりで、その仕事ぶりはすさまじく、その著作はいずれも圧巻である。

著者の著書の論述スタイルは独特である。その独特の論述スタイルは、著者によるとつぎのようである。「それは学術書と啓蒙書、専門書と一般書のどちらとも言えない、あえて言えばどちらにも通用する、そのようなスタイルを意識的にとってきました。ひらたく言えば、専門家にも読むに堪え、かつ一般の読者にも面白いものを心がけてきました。その試みに成功したかどうかは、自分ではわかりませんが、いずれにせよ、直接一般の批判に曝される形での学習と思索の公表は、学問を市民の手に取り戻す第一歩ではないでしょうか」(P.三〇〇)

このきわめて重要な心構えから執筆された論述スタイルは、大佛次郎の名著『パリ燃ゆ』全四巻（一九七五）からヒントを得ている、と推察しているが、かつて私はその論述スタイルを「物語としての物理学」と評したことがある。

最後に物理教育者の側面を考えると、著者が勤務する予備校の講義と多数の受験参考書は、多くの受験生を魅了している。受験参考書とは言え、その年齢に即し読まれる本格的な物理学書であることには変わらない。若い時代に物理学徒から科学史家・物理教育者へ転じて行く様子を、いささか本論から離れ立ち入って述べたのは、その道中の数々の書物は、本質的に一九六〇年の後半における著者が遭遇し、主体的に担った東大闘争が決定的な動因となり、上記の書物の内容と論述スタイルもまた、東大闘争と不可分の関係にある、と私は思うからである。

三. 物理学会の米軍資金拒否闘争と現代の動向

一九六七年五月五日（金）の「朝日新聞」は第一面で、前年一九六六年九月の半導体物理国際会議（日本物理学会主催）の一部に米軍資金（アメリカ合衆国陸軍極東研究開発局）が出ていることを、大きく報じた（同 P.六三）。ちなみに、この米軍資金の導入をはかったのは、鳩山道夫（ソニー研究所長）と上村泰忠（東大物理学教授）で、米軍との仲介をはかったのは茅誠司（元東大総長）であった。

当時は米軍のベトナム軍事行動が拡大の一途をたどっていた時期で、物理学者が人殺しの米軍の資金で研究するとは何事かと思った著者は、「軍関係資金問題に関する物理学有志の会」を立ち上げ、四項目の要求を掲げ、一九六七年九月の日本物理学会の総会で議決させた。このことは物理学の世界では有名な話で、その立役者が本書の著者だった。

その四項目のうちもっと重要なのは第三番目で、「日本物理学会は今後内外を問わず、一切の軍隊からの援助、その他一切の協力関係を持たない」という画期的なものだった。その議決は今日でも生き続けている。単純に言えば、人殺しのための学問研究はやってはいけない、という当たり前の議決だが、物理学者のあくなき好奇心には、人殺しの科学研究でさえ学問だとする魔性を帯びていることも事実である。

さて現代に目を転じて見ると、最近の欺瞞的・詐欺的・反知性的・刹那的で墮落した現政権の安保法制によって、現政権は上記の物理学会の決議に示された理念を踏みにじり、自衛隊活動と連動する防衛装備庁を発足させ、武器輸出を積極的に進め、米軍との軍事協力の研究まで具体的に進めようとしている。物理学研究の初心者が、日本物理学会の重い意味をもつ決議の拘束を忘れ、大きな軍事研究に雪崩を打って巻き込まれていく可能性は十分にある。現在は、そのような重大な局面にある。

米国における原爆製造計画「マンハッタン計画」のような科学技術の再現が、時代錯誤も甚だしく、日本の科学技術の世界にも到来しようとしている。科学技術の根幹をなす学

問を担う物理学者と物理学会は、どのように反撃し対処するのであろうか。いまの事態を認識するには、著者たちが上記で提唱し、物理学会が決議した内容でなければならないのは論を待たないが、この決議は、ますます重要な光彩を放つだろう。反撃と対処ができなければ、物理学研究自体を辞めることを覚悟すべき事態なのである。

四. 科学至上主義と科学研究停止 (モラトリウム)

戦前から敗戦後にかけて、科学技術の価値観の大転換を余儀なくさせられた。その際、まず日本がアジア諸国に侵略行為を働いたこと、そして米国との戦争に負けたことを率直に認め、深い反省の態度を表明すべきだった。しかし現実には、日本が戦争に負けたのは科学主義の脆弱さにあったのであり、どのような時代にあっても、科学主義は真理探究の絶対条件である、とする精神は変わらなかった。ただ科学的精神を鼓舞して科学至上主義を基調とする国家建設がはかられたのだ。著者は、戦後の科学技術者はこのようにして、心底それまでの科学的価値を反省し、その反省の認識に基づいて新たな科学技術を模索することを怠った、と厳しい批判を加えている。

例えば、原爆投下直後の地獄絵の広島を調査した物理学者の仁科芳雄や、被爆し「浦上の聖者」と呼ばれる永井隆（長崎医大助教授）ですら、広島の惨劇を目の当たりにしてもなお原子力の将来に信頼を寄せていることを指摘して、「科学者が未曾有の殺傷力と破壊力を持つ兵器を生み出したことにたいする悔恨や罪悪感、あるいは畏怖の感情等は、片鱗も見あたりません」（同 P.七四）と強い調子で論述している。

平たく言えば、著者が強い調子で批判するのは、このような惨劇を受けてもなお、原子力研究の停止（モラトリウム）の思考ができないほど、科学至上主義に呪縛されていた、ということである。幕末・明治から科学至上主義は一貫して理想化され続け、どのような惨劇下でもその科学神話が崩壊することはなかったし、科学者が己の研究に人間としての罪の意識を感じることはなかった、というのである。

この点で著者は、科学者の罪の意識の観点から、だいぶ以前に科学者の世界で物議をかもした文芸評論家・唐木順三の著書『「科学者の社会的責任」についての覚え書』の中身に、共感を表明している。唐木の主張は端的に言えば、核兵器を作り出しておきながら、その研究を担った科学者たちは科学研究の犯罪性や罪の意識は希薄だ、というのである。このような唐木の主張に共感を寄せる著者の認識に、私は目を見張り、またふかく共感する。

というのも、これまで科学者や科学論者が、唐木の主張に共感した例をほとんど知らないからである。それどころか、戦後の科学界の代表的論客である物理学者の武谷三男は、

唐木の主張を全面的に批判する『科学者の社会的責任—核兵器に関して』（一九八二）まで刊行した。武谷は、唐木の主張は科学者の発言の全体構造をみない素人の議論での外れだと批判する。その武谷には、幕末・明治以来、連綿と引き継がれてきた科学至上主義が内在し、あくまでも科学者と科学至上主義の存在を、不動のものとして自己肯定している。その立場からは、科学研究を停止（モラトリウム）するなどという精神は出て来えないのだ。

私が著者の見識に目を見張ったのは、ご本人は否定するだろうが、同じ物理学者の範疇に入る、と私には思える著者が、現実には米軍資金導入問題に具体的にに関わり、厳しい東大闘争を実践的に闘った体験から、物理学者の存在を自己肯定し、科学技術の進歩を絶対化する立場からの核問題の批判は不十分だとする唐木の主張に、共感していることである。

これはいわば科学者の自己否定にも通じる議論であるが、かつて一九七〇年代に原子力資料情報室を立ち上げた際の、武谷三男と高木仁三郎の微妙な認識の違いにも通じている。つまり武谷はあくまでの科学技術の諸問題の専門家の立場を保持し、その保持された立場から、全国の原子力の問題に苦悩する人々に助言やら支援をやるべきだ、と主張した。

これに対して高木は、身分が保障された科学者の立場をいったん否定し、苦悩する人のなかで彼らとともに闘い、科学の諸問題を思考する立場を主張し、現実にはその道を選択した。科学者と核の問題にかんする著者の見識には、近代科学技術批判に関わる立ち位置の深い洞察が内包されていると思える。

五. 産学官癒着の構造とその歴史的源流

三・一一以後、原発の安全性や建設許可等を審査する大学教授が、電力会社や原子炉製造会社から多額の金銭を受領している事実が明らかになった。著者は新聞各紙の記事をもとに具体的に人名をあげている。班目春樹（東大教授）、岡本孝司（同）、関村直人（同）、山口彰（阪大教授）、山本章夫（名大教授）をはじめ、多数の国立大学の教授たちである。その中の班目東大教授が「特段の問題はない」と居直っていることにたいして、著者は、「冗談ではない」「この行為は常軌を逸している」、と厳しく批判している。

さらに三菱グループから東京大学（五神 真総長）に対して、約三億六七〇〇万円もの寄付がなされ、三菱が東京大学の運営に深く関わっている事態を踏まえ、「とうとうここまで来てしまったのか、というのが正直な感想です」（同 P.二七〇）と呆れかえっている。

この常軌を逸した事態が、何故にかくも平然と起こるのか、との源流を探る視点から見

ると、本書の以下の章「日本の科学技術のはじまり」（14章）「軍学協同のはじまりについて」（15章）「戦時下の科学技術について」（16章）「とくに東大工学部のケース」（17章）「高度成長の影と戦後民主主義」（18章）を読むと、沢山のことが語られ、とても勉強になる。それらの考察を踏まえ、東京大学工学部が成立するまでの詳細な歴史的源流を論述しながら、著者は「原子力村を作りだした東京大学工学部原子力工学科のルーツを見る思いがします」（同 P.一八二）と述べている。

幕末・明治以来の日本の科学技術は、率直に言えば、軍部主導の戦争のための研究であって、敗戦後は、アジア諸国にたいする侵略行為を何ら反省することもなく、戦争に負けたのは科学技術力が脆弱だった、との短絡的思考から、戦前の科学技術の思想をそのまま戦後まで引き継いだことに大きな要因がある、と著者はみている、と私には思える。

その典型例が東京大学工学部で、戦時下の軍事科学研究と密接に関係し、戦後もその思想が変わることがなかった。だから先に見たように、原子力村を形成する御用学者たる東大教授たちが、ハイエナのごとく研究費に群がり取りつき、結果的に、今日の原発被害者を出し続けるという構造を呈している、とも考えられる。ことは重大である。

六. 私の一九六〇代後半からのこと

一九六九年二月二一日（金）のことである。日比谷公会堂で開催された「東大闘争報告一労学市民連帯集会」において、東京大学理学部大学院生（素粒子論専攻）で東大全共闘代表の著者は、のちに語り継がれる演説を行った。この演説で著者は、東大闘争の出発点となった東大医学部の登録医制度や医療の帝国主義的再編などに鋭い分析を加え、東京大学の存在と現状を徹底的に批判し、安保・沖縄闘争に連帯することを表明した。

私はこの歴史に残る演説を、数千人の群衆で埋め尽くされた日比谷公会堂二階の中央最前列で聞いた。この演説は著者の『知性の叛乱』（一九六九）に収録されている。当時の私は、東京大学宇宙航空研究所の材料科学研究室で研究助手のようなことをやっていた。同研究所の少なくとも私が所属していた研究室では、政治的には全く無風の状態で東大闘争など話題にすらならなかった。しかし、すぐ近くにある駒場や街頭で連日繰り広げられている同世代の運動に、私が揺さぶられるのは当然のことだった。

将来は何らかの形で身分が保証される同研究所で仕事をするつもりでいたので、いろいろと悩んだが、結局、上記の演説の影響や諸般の種々の事情から、同年六月二六日に同研究所を自主退職し、完全に無職となった。さまざまな日雇の仕事をやりに食いつないできた。いま振り返ると人生の大きな転換点だった。

一九七二年八月、町田市に住んでいた私は、隣接する相模原市の米軍基地相模補給廠から南ベトナムへの戦車搬出阻止闘争に加わるようになり、毎日曜日は相模補給廠前の集会やデモに参加していた。自治体を巻き込んだ激しい闘争だった。この反米軍基地闘争は科学技術者の社会的責任の問題とも密接に関係していた。一九七三年七月から一ヶ月ほど、南ベトナムを含む東南アジア諸国を取材し、東京の反戦集会で「ベトナム現地報告」を行っている。一九七五年四月、ベトナム戦争は終結した。

その一方で、若い時に、諸般の事情から、十分に勉強する機会に恵まれなかったこともあり、もろもろの学問にたいする飢えにも似た衝動的な欲求が湧き起こっていた。数年後の一九八〇年九月、高田馬場にあった「寺子屋教室」で、著者が講師を務める勉強会（力学的世界の系譜）に参加することになった。これも大きな転換点となった。それ以来、自分で言うのも気が引けるが、水を得た魚のように、読書と思索の日々を送ることになった。とりわけ著者の膨大な書物の読み込みを通じた思索は、三五年以上にも及んでいる。その読書と思索は今日まで続き、私の精神生活を支える大きな指針となっている。

おわりに

以上で『私の 1960 年代』に記されている膨大な内容のほんの一部について、僭越ながら私の個人史を含め、ささやかな所感を述べた。振りかえれば、著者の『知性の叛乱』から本書までの半世紀にも近い時空を生きてきた著者は、一貫した思考スタンスで社会的諸事態と対峙し格闘してきたのである。